悪ノ物語

黄昏の悪魔と偽物の女王

mothy_悪ノP／著
柚希きひろ、△○□×（みわしいば）／イラスト

PHP
ジュニアノベル

イツキ

読書好きの小学五年生。伯父が管理する「秘密の書庫」で出会った紙の悪魔・マリーと「けいやく」した過去を持つ。母・キョウコには、紙の悪魔たちとの事件を秘密にしていたけど……。

マリー

見た目はハムスターだけど、実は「紙の悪魔」。イツキの伯父・マサキの手によって、秘密の書庫に封印されていた。過去については謎が多いが、とんでもなく長生きをしているようだ。

紙の悪魔

紙の体を持つ悪魔。本やお札といった「紙」への変化はもちろん、ハムスターやサメ、ヤギやブタなど、自身の特性にあわせた紙の動物の姿にも変化できる。紙の悪魔と「けいやく」すると、紙を傷つけたり、燃やしたりできなくなる「のろい」がかけられてしまううえ、いずれ、「冥界の主」の裁きを受けることになる。「けいやく」を解除するには、秘密の書庫に収められた「物語」の続きを書き、五体の悪魔に「物語」を認めてもらう必要がある。

ツグミ

陰陽師の血を引く、小学六年生。式神のオオカミ・トモゾウを連れている。イツキが紙の悪魔と「けいやく」してしまい困っていた時に助けてくれた。美少女。

マサキ

イツキの伯父で、ハルトの父親。マンションを経営していて、一階は書庫に改造している。「秘密の書庫」、つまり「紙の悪魔」たちの管理者でもある。男手一つでハルトを育てている。

ハルト

ゲームやネットに詳しいイツキの従兄弟。学校ではイツキと同じクラス。サッカーが得意。父・マサキと、母・カヨコは悪魔に詳しかったが、ハルト自身は何も見えないようだ。

目次

1話～006
2話～019
3話～027
4話～040
5話～056
6話～062
7話～068
8話～075
9話～083
10話～090
11話～104
12話～116
13話～132
14話～138
15話～146
16話～158
17話～172
18話～180

AKU NO MONOGATARI
TASOGARE NO AKUMA TO NISEMONO NO JOOU

夏休みのある日、ぼく・イツキは伯父さんが管理するマンションの一室——「秘密の書庫」で、紙の悪魔・マリーと「けいやく」してしまったんだ。けいやく者には、「冥界の主」の裁きが待っている……そのことを知ったぼくは、従兄弟のハルト、陰陽師の血を引くツグミにも協力してもらって、なんとか「けいやく」解除に成功！
二学期が始まり、ハルトと同じクラスに転入したぼくは、学校生活が忙しくて「秘密の書庫」から足が遠のいていたんだけど……。

1話

自分と他の人では、見えている景色がちがう。
そんなことだってあるかもしれない。
世界――いやもっと小さく、たとえば自分の住む町を基準に考えてみよう。
その方がより実感がわきやすいというものだ。

今は自転車で大通りを走っている最中。
天気は良く、風もほとんど吹いていない。
通学時間はもう過ぎているので、通りを歩く人の数は多くない。
パチンコ屋の前で何人か並んでいるのが見えたが、まあそれくらいだ。
しばらく進むと、向かいにコンビニがある小さな公園の前にさしかかる。
そこでは三、四歳くらいの男児と、その母親らしき女性が砂場で遊んでいるのが見えた。
――それを見て、何を思うか。

単に楽しそうだな、と感じるだけかもしれない。
あるいは、自分にもあんな時があったな、と懐かしい気持ちになる人もいるだろう。
その「懐かしい」も、男児の方と母親の方、どちらに昔の自分をあてはめるかは、人によってちがうんじゃないだろうか。
それから「懐かしい」気持ちをたいていの人は良いものとしてとらえるだろうが、逆の場合もあるかもしれない。
「昔は良かった。だけど今は……」なんて暗い気持ちになってしまう——そんなパターンだって、ないとは言えないのだ。

ともあれ、この町は平和だ。
少なくとも、目の前のこの景色を見ている限りでは。

だけど、そういう風には見えていない人も、いるかもしれない。
最近、この公園の前の横断歩道で人がバイクにはねられたそうだ。
幸いにも命に別状はなかったようだが。

多くの人は、それを単なる事故だったと思っているだろう。
ひったくりによる犯行だったということは、もう少し事情に詳しい人なら知っている。

しかし、こう考える人は少ないだろう。
「あれは、『悪魔』によって引き起こされた出来事だったのだ」――と。

――そんなことを考えながら自転車を走らせていたキョウコは、やがて壁の白い古風なマンションの前で足を止め、自転車から降りた。
キョウコの兄・マサキが所有しているマンションだ。彼女とその家族も、二カ月前までここで暮らしていた。
入り口を通り抜け、右に曲がってすぐのところにある管理人室のドアをノックする。
「どうぞ」
ドアを開けると、中にいたマサキが椅子に座るようにうながしてきた。
「さて……じゃあ始めようか。履歴書は持って来たね？」
「ええ」

キョウコは黒い手提げカバンから履歴書を取り出し、マサキに渡す。
「こんな風にかしこまる必要もないんじゃない？」
そう言ったあと、キョウコは少し口を尖らせたが、それに対してマサキは平然と「一応、面接だからね」と答え、履歴書に目を通しはじめた。
「――遠藤キョウコ。三十四歳。住所は鶴黄市の……ここからは少し遠いね」
「全部、知っていることでしょうに」
「まあまあ。で、ちゃんと通える？」
「自転車なら十分もかからない距離よ。問題ないわ」
「新居は快適かい？」
小学五年生になる息子の夏休みの間だけ、このマンションを借りた。
その後、無事に完成した新居へと、遠藤一家は引っ越したのだ。
「おかげさまで。夫も通勤時間が短くなって良かったって嬉しそうに言ってたわ」
「イツキくんは？」
キョウコの息子の名前だ。マサキにとっては甥っこにあたる。
「あの子も……今のところ、新しい学校では問題なくやっているみたい」

少し複雑な顔をしながら、キョウコは答えた。
「そうかい」
キョウコの表情が意味するところを、マサキも理解している様子だった。
しばらくの間、二人の間に沈黙が流れた。
「……ハルトくんには、感謝しているわ」
「ああ、同じクラスになったんだってね」
マサキの息子であるハルト。
イツキとハルトは夏休みの間にずいぶんと仲良くなったようだ。
「ええ。おかげでイツキもすんなりとクラスになじめたみたい」
「あいつとイツキくんじゃあ、趣味も遊びも合わないだろうに」
「それでも、誰も知り合いがいないよりかはずっとましよ。それに案外あの二人、気が合っているみたいよ」
「それならいいがな……ハルトにとっても、イツキくんにとっても」
仕事の面接にしては、ずいぶんと話が脱線してきている。
そのことをキョウコが指摘すると、マサキは小さく笑った。

「ハハ、それもそうだな。では本題に戻ろう。――あらかじめ話していた通りキョウコにはこのマンションの管理人を頼みたい。期間はあさってから二週間。時給は８５０円だ」
もはや採用が決まったような口ぶり。
元々、この面接自体が形式的なものに過ぎないことがわかる。
「本音を言えば、もう少し時給をあげてもらいたいところだけどね……」
キョウコは小さくため息をつく。
「まあそう言うなよ。管理人っていったって楽なもんだぜ。住人もあいかわらず少ないしな」
「まあ、家計の足しくらいにはなるかしらね」
「そういうこと。おれとしても留守の間、身内がここの管理人をしてくれていた方が安心できる」
「そうね。その点では兄さんに感謝しているわ。マンションの部屋をただで貸してくれたり、この仕事の件も。お金は必要――」
そこでキョウコは、急に言葉を止めた。
「どうした？」
「――お金の話で思い出したの」
キョウコはマサキをにらみつけた。

「兄さんに文句を言わなきゃいけないことがあったって」
「ほう、それはなんだい？」
とぼけた口調だったが、マサキの顔は確実に気まずそうなものになっていた。
「兄さん――イツキを『書き手』にしたわね」
「……ばれていたのか」
マサキは右手で目をおおった。
「イツキくんがお前に話したのか？」
「いいえ、あの子は何も。でもね……私が気づかないとでも思った？」
「お前は昔からそうだな。察しがいいというかなんというか――どこまで知っている？」
「大方、全部よ。イツキがマリーと『けいやく』したこと。それからセイラムが書庫から持

ち出されて、ひと騒動起こしたことも。あとは——」

キョウコは言葉を続けようとしたが、それをマサキがさえぎった。

「——ちょっと待て。いくらなんでも詳しすぎるな」

「……」

「イツキくんが話したんじゃないとすれば、誰がお前にそれを教えた？」

「……」

今度はキョウコが気まずそうな顔になり、マサキから目をそらした。

「……そうか。答えたくないならそれでいい。だが……お前のその表情を見て、大体察しはついた」

「言っておくけど、ハルトくんが告げ口したわけじゃないわよ」
「――そんなことはわかっている」
マサキはわずかに語気を強めた。
彼が不機嫌なのは、表情からも明らかだった。
だが、負けじとキョウコも言い返す。
「何？　何か不満？　怒りたいのはこっちの方なんだけど」
「こう言っちゃなんだが、お前は自分の子供の教育をしっかりすべきなんじゃないか？　立ち入り禁止の場所に無断で入ったのはイツキくんだ。それさえなければ、ことは起きなかった」
「どうだか。兄さんがそうなるように仕向けたんじゃないの？」
「言いがかりだ」
マサキはそう否定したが、じっとにらみ続けるキョウコを見て観念したのか、正直に白状した。
「……しょうがなかったんだ。ハルトは本に興味がない。他になり手が――」
「人の息子を危険な目にあわせておいて！」
キョウコがこぶしを、自分のひざの上にふり下ろした。
「……イツキくんがビルから落ちたことか。それについては謝る。間口とセイラムの件について

は、おれも想定外だったんだ」
「『悪魔』との『けいやく』は不幸をもたらす……それは兄さんだって知っていたでしょうに。そこまでして、イツキを『書き手』にした理由はなんなの？」
「そんなもの――一つしかないだろう」
マサキは真剣な表情で、こう答えた。
「――『逢魔が時』」
「……それはもう、あの時に終わったはずよ」
「そうだな。だが、時は巡る。二十年を経て、この町に再び現れたんだよ、『奴ら』がな」
ある程度の覚悟はしていた。
マサキが軽い気持ちで悪魔とイツキを関わらせるような人間でないことを、キョウコは知っている。
「……イツキには、そのことを――」
マサキは首を横にふった。
「まだ話していない。いきなり全てを話しても、理解しきれないだろうしな」
「そりゃそうよ。あの子には……荷が重すぎるわ」

「そうだろうか？」
「イツキはたしかに読書好きよ。でも、作家になろうとまで考えているわけじゃない。あの時の兄さんとはちがうし、何よりまだ幼いわ」
「高校生と小学生で、大きな差なんてないさ」
「それは兄さんが、子供の時から大人びていただけよ」
「イツキくんだって、ずいぶんとしっかりしているようにおれには見える。……大丈夫だって」
マサキはキョウコの肩を軽く叩いた。
「おれもできるだけのサポートはする。それに……日々野家のおじょうさんも、イツキくんの友達になったみたいだしな」
「陰陽師の血なんて、今さらあてにできないわよ」
「ハルトだっている。頼りになるかはわからんが。何もイツキくん一人に背負わせようってわけじゃないんだ。彼にもまた、仲間がいる。昔のおれと同じように」
「仲間、ねえ……」
そう言ったあと、キョウコは少しうつむいた。
「そうなってくれればいいけど」

「不安か？」
「……あの子が転校することになった理由、知ってるでしょ？　……まあいいわ」
キョウコは顔をあげた。
「で、どうなの？　面接の結果は」
「急にそっちの話に戻るのか」
「兄さんの様子からすると、まだ『逢魔が時』が本格的に起こりはじめたってわけじゃないんでしょ？」
「まあな。正直に言うと、まだその予感を察知したに過ぎないところなんだ。具体的に何かが起きたわけでもないし、『奴ら』の動きもつかめていない」
「なら、今は現実的な話をしましょうよ」
「そうだな。じゃあ――」
マサキは軽く咳払いをした。
「――まあ、採用ということで」
「そりゃ、どうも」
マサキはホチキスで留められた、数枚の紙束をキョウコに手渡した。

「あさってまでに読んでおいてくれ。仕事のマニュアルだ」
「わかったわ」
紙束をカバンに押し込み、キョウコは立ち上がった。
「兄さんも――旅行、楽しんできてね」
「……ああ」
今の話を聞いた以上、それが単なる遊びの旅行でないことは大体、想像がつく。
それでもキョウコはそう告げ、マンションを後にした。

給食を食べ終わったイツキは、食器をのせたトレーを持って席から立ち上がると、そのまま配膳台の方へと向かった。

先に食べ終えた人たちの食器が、すでに配膳台の端に重ねられている。

その上に自分の食器を置いていると、背後から同級生の穴井ミツグが声をかけてきた。

「なあ、イツキ。昼休みはどうする？」

「ああ、ええと――」

「予定がないならおれたちのチームに入れよ。今日は二組の連中と試合だ」

なんの試合かは聞くまでもない。

おそらくよく彼が中心となって昼休みにやっているサッカーのことだろう。

イツキがすぐに答えられないでいると、今度はトレーを持ったハルトが二人の前に現れた。

「悪いな、イツキはおれと先に約束してるから」

そう言いながらハルトは食器を配膳台に置く。

実際にはそんな約束をした覚えは、イツキにはなかった。

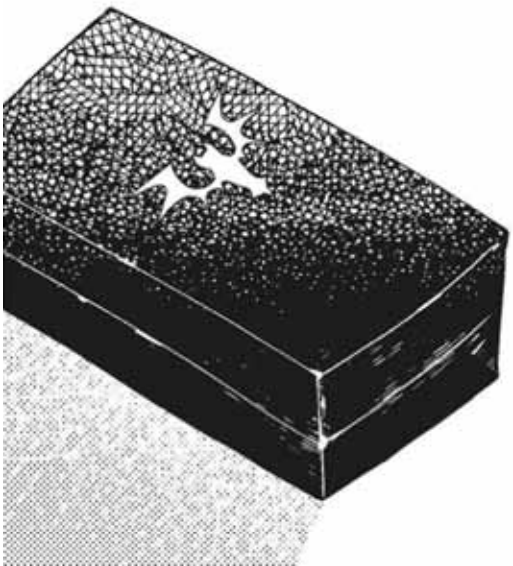
しかしミツグは、

「あっそう。じゃあ他を探すわ」

と、あっさりと引き下がり、その場を離れて別の男子に声をかけはじめた。
「おおい、カケル――」
その様子をながめながら、ハルトがイツキにぼそりと言う。
「嫌なら、そうはっきりと言った方がいいぞ」
「別にそういうわけじゃ――」
「表情を見れば誰だってわかる。ミツグだって多分、気がついてたと思うぜ」
だから空気を読んで、すぐにあきらめたというわけか。
ここでイツキに、ある疑問がわく。
「……ハルトは参加しないの？　サッカー」
イツキが誘われているのに、サッカー部であるハルトが声をかけられていないのもおかしな話だ。
ハルトは首をふりながら、こう答えた。
「おれは他の連中とはレベルがちがうからな。本気を出すとみんな、冷めちまうんだ」
「なるほどね」
「おれさえいなけりゃ、ミツグがクラスで一番上手い。だから目立ちたがりのあいつは、あえて

おれを誘ったりはしないのさ」
「それでいいの？　ハルトは」
「ああ。クラスの奴らとする遊びのサッカーじゃ練習にもならないし、昼休みくらいサッカー以外のことをしたいしな」
サッカーが好きなのか嫌いなのか、よくわからない言葉だ。
では、ハルトが昼休みにしたい「サッカー以外のこと」とは、なんなのだろうか？
彼はポケットから小さな箱を取り出し、イツキに見せてきた。
中心にコウモリっぽいマークが描かれた、真っ黒な箱だ。
「というわけで、今日はこれでおれたちと遊ぼうぜ」
「それは？」
ハルトが箱を開ける。
すると、中にはカードの束が入っていた。
「『マスター・オブ・ザ・デーモン』だ」
名前だけなら、イツキも知っている。
「トレーディングカードゲームだよね。でもぼく、カードを持ってないよ？」

「おれのを貸してやるよ」
ハルトはまた、別の箱を取り出した。
「『ベリトード』と『アモスティア』が入っているデッキだから、初心者でもそこそこやれると思うぜ」
「いや、そもそもルールを知らないし」
「なら、おれたちがやっている様子を見学すればいい。そうすりゃ自然にルールも覚えられる」
配膳台のすぐそば、ハルトの後ろで三人の男子が、机の上にカードを並べている。
それをチラリと見たあと、イツキは答えた。
「……せっかくだけど、やっぱりえんりょしておくよ」
ハルトは残念そうに肩をすくめる。
「ゲームなら、お前とも一緒に楽しめると思ったんだけどな」
教室に携帯ゲーム機やスマートフォンを持ち込むことは禁止されている。
それらを持っている場合、朝学校に来たら職員室に預



けるのがここ鶴黄小学校の校則だ。
だから昼休みに行う遊びといえばサッカーやトランプ、それにこういったトレーディングカードゲームなどになってくる。
運動が苦手なイツキにしてみれば、サッカーと比べればだいぶ魅力的な誘いではあった。
しかし、今日は別の予定がすでにあったのだ。
「今日は図書室に行くつもりだったんだ」
「はあ……あいかわらず本の虫だな」
ハルトが少しあきれた顔をする。
実際、夏休み中に起こったあの件以来、イツキが本を読む機会は以前よりもずっと増えていた。
自分自身で一つの物語を書き上げたことで、本に対する興味が増したのかもしれない。
「夏休みが終わって、ハルトのマンションに行く機会も減っちゃったしね」
あのマンションには広い図書室があった。
イツキやハルトのお祖父さんが集めた書物が収められた場所だ。
「えんりょせずに来ればいいじゃん」

「そうは言っても、やっぱり少し家からは遠いから」
それに――当然と言えば当然だが――あのマンションの図書室にはいわゆる「今どきの本」というのがない。
その点、この学校の図書室には新しめの、しかも小学生向けの本が揃っていた。
(まあ、逆にあのマンションの図書室にしかないものもあるけど)
イツキは一人の――いや、一匹のハムスターの姿を頭の中で思い浮かべていた。
「また遊びに行く」と約束したのに、あれからマリーには一度も会っていない。
たまにハルトのマンションに遊びに行っても、あの「秘密の書庫」には鍵がかけられている。
伯父さんの許可なく入ることはできないのだ。
とつぜん、書庫の鍵が壊れて閉まらなくなったりすれば話は別だが、そんな都合の良いことが起こるはずもない。
そう、そのはず、なのだが……。
イツキは、最近読んだ本で気になることがあった。
その本の続きを読むために、今日は図書室に行きたかった。
「じゃあ、そろそろ行くね」

イツキは教室の入り口に向かって歩きはじめた。
背後から、ハルトのため息が聞こえた気がした。

3話

図書室は学校の一階、階段のある場所から一年生の教室の前を通り過ぎた先にある。
イツキが引っ越す前に通っていた学校にも図書室はあったが、そこよりは少し広く、本の数も多いように思えた。
静かに扉を開けると、中にはすでに数名の、読書にいそしむ人たちの姿があった。
入り口付近の席には、六年生らしき四人の男女。
そのうち一人の顔を、イツキは知っていた。
ツグミだ。
「……」
彼女と目が合ったイツキは、無言で軽くおじぎをする。
それに対し、ツグミの方も目だけであいさつを返してきた。
学年がちがうのでしょうがない話ではあるが、夏休みが終わって以降、ツグミとの接点はほとんどない。

こうしてたまに見かけた時に、目であいさつをかわすくらいだ。
たいていの場合、ツグミは今日と同じように何人かの同級生に囲まれている。
その多くは男子だ。

悪魔や式神についてのことなど、ツグミに聞きたい話がないわけではなかったが、そのような状況の中に割って入る勇気など、イツキにはなかった。
上級生の男子に目を付けられたら、たまったものではない。
下手をすれば――。
（……また、同じことになる）
これ以上、両親に迷惑はかけたくない。
この学校では余計なトラブルを起こさない……そうイツキは心に決めていた。

ツグミたちの前を通り過ぎ、イツキは奥の本棚へと向かった。
この棚には人気のある小説やマンガなどではなく、地味な歴史書や資料などが収められている。
正直、この辺りの本ならばあのマンションの図書室の方が充実していそうではあるが、あちらの本はイツキにとって少し難しい物が多かった。
その点、ここにある本の多くは文字数が少なく、内容も簡潔でわかりやすいのだ。
イツキは本棚から『鶴黄市の歴史』と背表紙に書かれた本を取り出した。
最後のページには発行された年が書いてある。

今から五年前に書かれた本だ。
それを持ってイツキは本棚をはなれ、近くの席に腰かけた。
机をはさんだ向かいにはもう一人、眼鏡をかけた女の子が静かに本を読んでいた。
同じクラスの葉月マナだ。
彼女の読んでいる本。
その表紙に書かれた文字を見て、思わずイツキは目を見開いてしまった。
――『世界悪魔事典』。
まじめでおとなしそうな彼女には、あまり似つかわしくない本だとイツキは思った。
マナの顔をチラリと見ると、目が合ってしまった。
「……」
しかし彼女は何も言わず、すぐに本の世界へと戻っていった。

（悪魔……かあ）
イツキが本物の悪魔たちと出会ったことを知ったら、マナはどんな反応をするだろうか？
動物の姿をかたどった、紙でできた悪魔。
紙の悪魔、マリーとの出会いが、あの夏休みに起こった不思議な出来事の始まりだった。
……そんなことを考えながらも、イツキは持ってきた本のページを開き、前回の続きから読みはじめることにした。
八十三ページ。
そこには「メータ脱走事件」と見出しが書かれている。
――今から二十年前、この町にあった動物園からツキノワグマの「メータ」が脱走した、というものだ。
本にはその事件が詳細に書かれているが、気になるのはその脱走の原因となった、ある不可思議な「現象」についてだった。
それは――。
「ねえ、遠藤くん」
正面から、イツキに話しかける声がした。

マナだ。彼女が本から目を離し、こちらを見つめていた。
「何？」
「……この町の歴史に興味があるの？」
「いや……まあ、うん」
イツキは自分の読んでいたページを、マナに見せた。
「歴史というか、この事件についてかな。だって不思議じゃない？　――『町中の鍵が、いっせいに壊れる』なんてさ」
マナは一瞬、驚いたような表情をしたが、すぐに冷静な顔に戻ってこう聞いてきた。
「……それ、本当だと思う？」
「どうだろうね。ぼくはまだこの町に越して来たばかりだから。葉月さんは何か知ってる？」
「……私たちが生まれる前に起こった事件だもの」
「まあ、そりゃそうか。親から何か聞いたりしたことは――」
その質問に答える代わりに、マナはイツキにこう告げた。
「あのさ、図書室であんまりおしゃべりするの、良くないと思う」
「……そうだね、ごめんなさい」

先に話しかけてきたのはそっちじゃないか、とイツキは内心では不満に思いつつも、おとなしく引き下がった。

「――まあ、それを守れない上級生もいるみたいだけど」

マナは軽く息をはきながら、横目でツグミたちの方を見た。

イツキもそちらに視線を送る。

ツグミ自身は静かに読書にふけっていたが、周りの男子たちは明らかに本になど興味がない様子で、ぺらぺらとおしゃべりに明け暮れていた。

話の内容は……昨日のテレビ番組がどうだったとか、まあとにかく図書室でわざわざする話題でないことはたしかなようだ。

「……なんなのかしら、あの人たち」

読書するつもりがないのなら出ていってほしい――そう言いたげな表情でマナはつぶやいた。

だが、別に彼らに注意するつもりもないようで……黙ってまた『世界悪魔事典』を読みはじめる。

これ以上何か聞ける雰囲気でもないので、イツキも読書を再開することにした。

――クマの脱走や鍵の異常などの事態が相次ぎ、町は大きな混乱におちいったようだ。

そのため、外からの鶴黄市への立ち入りが一時的に禁止になった、と書かれている。
クマに襲われて亡くなった人もいたみたいだ。
……常識では考えられない出来事。
それに「動物」。
さらには、この事件が起こったのが……二十年前だということ。
イツキは以前、マリーと交わしたこんな会話を思い返していた。
『――外に出るのは久しぶりだって言ってたけど』
『そうだな。およそ……二十年ぶりくらいか』
……この一致は、単なる偶然なのだろうか？
『鶴黄市の歴史』には、これ以上の詳しいことは書かれていなさそうだった。
（やっぱりマリーや他の悪魔たちに、直接聞いてみた方が早いかも）
彼女たちと会うのが難しいようなら、マサキ伯父さんにたずねてみるのもいいかもしれない。
母さんが大学に入って一人暮らしを始めるまでは、この町で家族で暮らしていたと言っていた。
（二十年前なら伯父さんは高校生、母さんは中学生……かな？）

クマのメータは、地元の鶴黄高校校舎にも入り込んだと本には書かれている。
（伯父さんが通っていたのが、この鶴黄高校かどうかはわからないけど……）
いずれにせよ、マンションと共に紙の悪魔たちを管理してきた伯父さんならば、何か知っている可能性は高い気がする。

イツキは顔をあげ、壁にかかった時計を見た。
そろそろ昼休みが終わる時間だ。
目の前のマナもすでに本を閉じ、立ち上がっていた。
ツグミとその取り巻きの男子たちは、いつの間にかいなくなっている。
借りられれば良いのだけど、残念ながら『鶴黄市の歴史』には貸し出し禁止のシールが貼られている。
イツキは、本を戻すために本棚に向かった。

貸し出しカウンターから歩いてきたマナと、図書室の出口で出会った。
同じクラスなので、そのまま一緒にろうかを歩いていく。

「――遠藤くんって、日々野さんと知り合いなんだね」
唐突にマナが、こう切り出してきた。
日々野、とはツグミの苗字だ。
「え、なんでわかったの？」
「図書室に入ってきた時、あいさつしてたから」
「ああ……」
「……」
どうして知り合いになったのかを、マナは特に聞いてこなかった。
逆にイツキの方が、彼女に質問する。
「葉月さんも、ツグミさんのことを知ってるんだ？」
「そりゃあもう。あの日々野家のおじょうさまだもの」
「はあ……ツグミさんの家って、そんなすごいんだ」
よくは知らないものの、ツグミがお金持ちであることは、その言動などからなんとなく想像はついていた。
「知らないの？」

「さっきも言ったけど、ぼく、まだこの町に引っ越してきたばかりだし、ツグミさんとも……顔見知りって程度で」
「……じゃあ『マスター・オブ・ザ・デーモン』は知ってるよね」
先ほどハルトが持っていた、カードゲームのことだ。
イツキはうなずいた。
「あれを作っているのも、日々野さんのお父さんが社長をしている会社なんだって」
「！　へええ……」
たしか、あのカードゲームを作っているのは「ソロモン株式会社」――かなり大きな会社のはずだ。
「マスター・オブ・ザ・デーモン」だけではなく、テレビゲームソフトの有名シリーズなんかも手がけている。
「家がお金持ちで、しかも美人。……男子が群がるのも当然と言えば当然よね」
マナが少し目を細めながら、そうつぶやいた。
「……女子から見ると、どうなの？　ツグミさんって」
「どう、って？」

「ほら、うらやましい、とか、逆になんかムカつく、とか――」
「うーん……」
マナは少し考えたあと、こう答えた。
「あこがれ、ではあるかな。ああいう風になれたらいいなって。あそこまで完ぺきだと、しっとする気持ちにもなれないし……まあ、これは人によるかな」
「……なるほど」
「あと、個人的には、彼女の陰陽師の血筋にも興味が――」
「え？」
そこでマナはハッとした表情になり、あわてた様子でこう言い直した。
「あ、今のなし！　なんでもない！　忘れて」
いくら有名だとはいえ、日々野家が陰陽師の子孫であることまで広く知られているものなのだろうか？
それとも、どうやって調べたのかわからないけど、マナだけが、陰陽師の子孫であることを突き止めたのか――。
（伯父さんはともかく……ハルトはそのことについて、特に何も言っていなかったし……）

先ほど彼女が読んでいた本から察するに、マナはそういったオカルト好きの子なのかもしれない。

「……あ、あのさ」

イツキが考えごとをしていると、マナが少し気恥ずかしそうに切り出してきた。

「もし、良かったらさ、今日――」

キーンコーンカーンコーン。

ろうかにチャイムの音がひびく。

「あ、まずい！　葉月さん、急ごう」

「――そうだね」

マナは言いかけていた言葉を飲みこみ、イツキと共にろうかを走りはじめた。